



定年退職のご挨拶

平成 31 年 3 月 31 日付

医学部放射線医学講座 教授 江 原 茂

私が盛岡に赴任したのは平成元年（1990年）7月で、平成が始まって半年程度が経過した時期でした。それから平成 31 年の今年まで 29 年を越える平成という年号の長さに匹敵する期間にわたり岩手医科大学に奉職することになりました。私は卒後 3 年あまりでアメリカの臨床研修プログラムに参加し、1982 年からニューヨークでレジデントを、アイオワでクリニカルフェローを、さらにボストンでは半ばスタッフとして働きつつ、放射線診断医として研さんを積んで来ました。1989 年に岩手医科大学中央放射線部長として盛岡に赴任したばかりの玉川芳春先生から、画像診断部門としての中央放射線部の創設をお手伝いすることのお誘いを受けこちらに来ることになりました。画像診断部門としての中央放射線部はそれ以後、放射線医学講座との統合を経て、放射線治療や核医学を含めた放射線診療を統括する組織として、放射線腫瘍学科の創設まで運営されていくこととなります。平成 14 年（2002 年）には、玉川先生の定年退職により、講座担任教授として放射線医学講座の診療・教育・研究の管理・運営を担当することになりました。力不足は免れなかったかもしれませんが、多くの熱心なスタッフに支えられ今日を迎えることができたことには幸いであったと感謝しています。

私の在任中はそれまでのアナログからデジタル画像情報のネットワーク化の時期にあたっており、現在の画像システムで爆発的に増加した画像情報とその効率的運用が図られていることは、今後の発展の基盤として重要であると信じています。私の専門である骨・関節の画像診断の発展への寄与がいくぶん後回しになったことは否定できないのですが、その点をご容赦頂きたいと思っています。放射線医学講座では、現在教室にいるメンバーも含めて、岩手医科大学の卒業生のみならず近隣の大学の出身者を中心に少なからぬ研修医の方々に接する機会を得ることができ、新たな経験を共有できたことは幸いでした。那須赤十字病院、東北大学や筑波大学などから、さらには韓国やタイからも研修に来ていただきました。お互いに大きな刺激になったのではないのでしょうか。

岩手医科大学の方々は残された大事業である病院の新築移転と内丸地区のメディカルセンターの再構築に忙しい日々を費やすことになるのではないかと思います。大変多忙な時期を無事乗り越えられて新たな岩手医科大学附属病院が出現することに期待しています。私の専門である放射線診断は AI の出現によるさらなる変革への過渡期にあり、新しい画像診断に向かってさらに研さんを深めていかなければと考えています。



定年退職のご挨拶

平成31年3月31日付

PET・リニアック先端医療センター 教授 中村 隆二

昭和55年に本学医学部を卒業して以来ほとんどの期間を内丸の大学と附属病院での仕事に就かせて頂いて早くも38年経ち定年を迎えました。この間指導を仰いだ畏敬する諸先生方はもとより、学内外の圭陵会会員の皆様に大変お世話になったことを心より御礼申し上げます。

私は医師になって当時の第一外科に入りロジカルでハードな外科臨床の洗礼を受けて新しいエビデンスをみつきたいと考えるようになりました。第二病理で学位を取得した際にはリサーチの心構えから論文の書き方まで教わり大きな糧となりましたが、何より動物実験で3年間のうちにクリアな結論が出た成功体験が大きく、外科にもどってからも消化機能研究室でグループの実験に関わっていました。外科の修練を積みながら門脈圧亢進症の臨床研究に取り組み、昭和の終わりに米国デトロイトの救急病院外科内視鏡部門に1年留学しましたが、膨大な臨床データをPCに集約してレジデントがサクサク論文にまとめていく姿が印象的で、帰国後は症例のデータベース記入が日課となりました。助手になり初めて指導した大学院生の実験で狙い通りの結果が出てホッとした頃に自損事故をおこし外科医を続けられなくなり、平成6年から中央放射線部に移り兎に角一人前の放射線診断医になる目標で再

スタートしました。多少CTが読めるようになって欲が出て放射線治療に関わり始めましたが、折しも当院はリニアックとRALSがほぼ同時に3D治療計画システムへ更新される一大転換期にあたり、事の重大さに気づく間もなくバーチャルな治療計画に没頭してしまい治療専門医となりました。平成16年には前立腺癌に対する新たな小線源治療の前向きコホート研究が始まるとデータベースは肥大化の一途でしたが長期成績が網羅されたおかげで学位論文を含む幾つかのペーパーを生みました。平成22年12月にPET・リニアック先端医療センターが別棟に開設された際、特任教授を拝命してセンター長に就任しました。年間約2,000件のデリバリFDG-PET検査を行い、また、待ちかねた高精度放射線治療も次々に日の目をみて適応も拡大し続けています。矢巾には更に高規格のリニアックが2台設置される予定で治療成績の向上が見込まれます。

奥深い医学に紆余曲折しながら長きにわたり携わることが出来たのは大変な幸運でしたが、育てて頂いた外科を途中で退いたことは慚愧に堪えません。放射線の素養に乏しいまま放射線治療に踏み込んでしまいましたが、危なっかしい私の歩みを支えて下さいました放射線科教室の先生方、放射線技師の皆様にあらためて感謝いたします。



定年退職のご挨拶

平成 31 年 3 月 31 日付

医学教育学講座・解剖学講座 教授 佐藤 洋一

昭和 53 年（1978 年）に本学医学部 27 期生として卒業以来、解剖学の道に進んだのが、ついこの前の様に思い出されます。大学に入った当初は臨床医を目指していたのですが、学部学生のとときに基礎医学の先生方に感化され、そのまま卒業後は解剖学の助手となっていました。興味は生理学にあったのですが、「助手の席が空いたので、仕事も楽だからやってみませんか」という山内昭雄教授の甘い言葉に誘われて基礎医学研究の道に踏み込んだ（あるいは、迷い込んだ）のであります。2 年間、もっぱら電子顕微鏡を友として、夜討ち朝駆けの毎日を過ごしました。明け方 4 時頃に電子顕微鏡室に向かうときに、神経解剖学の先生方が実験を終わって帰る際に、「おはようございます」と「おやすみなさい」という挨拶を何度交わしたことでしょうか。基礎研究が 9 時 5 時の生活などということは、全くの幻想に過ぎませんでした。その合間に、学生実習用の脳標本の連続切片を切ることもしましたし、古代人の人骨を掘り出す作業もいたしました。さて、教授退任にあたってのご挨拶であるにも関わらず、大学卒業直後の事柄を書き連ねましたが、それは、私の原点での経験が教授になってもそのまま生きていることに気がついたからであります。

平成 7 年に母校の教授（ミクロ担当の解剖学第二講座、現在の解剖学講座細胞生物学分野）に就任したのは若干 42 歳で、恩師の先生方に混じっての教授会は、まことに緊張するものでありました。それまでは北海道旭川医科大学に奉職しておりましたが、そのきっかけも上司の先生から「来てみませんか」という誘いの甘い言葉でした。マクロ実習担当の教室でしたから、実習そのものはもちろん、その準備と後始末は、想像もつかないほどハードで、しかもマクロの知識を自分のものにするにはかなりの時間を費やしました。研究は電子顕微鏡中心のミクロでしたから、これまた最新の細胞生物学の知識習得は必須要件でした。そんな多様な経験をしてきたのですが、母校に戻ってからは教育と研究が表裏一体で、細胞生物学に集中できる

と思ったものでした。実験装置は少しずつ科研費などをベースにして徐々に買いそろえ、自分の思う様な研究環境も整えることが出来ました。生きた細胞・組織のイメージングが研究テーマでしたから、標本が死ぬまで実験を続けることとなります。会議や電話をすっぽかすこともしばしばでした。まさしく夜討ち朝駆けで、強いわけではありませんが、或る大学院生は顕微鏡の下で寝泊まりしていたこともございました。では、そればかりであったかと言うと、学際的研究チームのマネージメントを任されました。講座横断的な若手研究者によるプロジェクトを立ち上げたことは、岩手医科大学における研究面での風通しを良くしたのではないかと自負しております。また、教育面では教務委員を仰せつかり、そこでは教育のノウハウを学内に啓発する活動をおこなってまいりました。特別に私が教育学に精通していたわけでもないでしょうが、医学教育分野別評価にあたって教育学分野の部署の設立を要請され、教育学講座の初代教授に就任したのが平成 25 年でした。医学部長を拜命してからは、低迷する国家試験合格率の向上に意を砕いたのですが、長年培われた「どうにかなるさ」体質の打破は容易ではありませんでした。細胞生物学の研究三昧ができる、と思い込んでいたのは、まさしく幻想でありました。

兎にも角にも、私は卒業以来、上司からの誘い（半ば強制かもしれませんが）に唯々諾々と従って参りました。また、一途に専心したいという希望と裏腹に様々なことをさせられてきました。しかし実は私にとってそれは、生き甲斐であったことに気がつかされます。一見、させられ感の強いものではありませんが、多くの経験が出来ましたし、それを楽しんでいたことを否定はできません。旭川医科大学あるいは岩手医科大学での教員生活において、圭陵会の諸先輩や同僚の皆様には陰に陽にご支援を賜りました。ここにあらためて御礼を申し上げたいと存じます。有難うございました。



定年退職のご挨拶

平成31年3月31日付

医学部内科学講座

神経内科・老年科分野 教授 寺山靖夫

光陰矢の如し。岩手医科大学に在籍して15年と11か月が過ぎました。学生時代の6年間と合わせて約22年間岩手医科大学にお世話になりました。

大学卒業後は慶應義塾大学での研修、米国留学、清水市立病院（現静岡市立清水病院）、横浜市立脳血管医療センターでの勤務を経て、平成15年（2003年）5月に内科学講座神経内科・老年科分野教授として24年ぶりに母校に戻りました。

教室運営に対しては、「和して同ぜず」、「現場主義」をモットーに教室の体制の刷新を図り、岩手医科大学神経内科・老年科の「顔」を明確に示すことを目的としました。東北地方のきわめて多数で多彩な神経疾患の診療を余すところなく行うことを目標に、「脳卒中」、「パーキンソン病」、「認知症」、「多発性硬化症などの神経免疫疾患」、そして「頭痛」に関しては教室の誰もがエキスパートとして関われる疾患として前面に打ち出す努力をしてきました。その甲斐あって、現在の岩手医科大学神経内科・老年科はこれらの疾患の有数の専門病院として東北地方のみならず全国から患者が集まるようになりました。

「啐啄」の教えのもとに指導医が若い研修医を育てる環境を作り上げた結果、就任当初10人だった教室員は現在では25人に増え、総合診療を目指す神経内科として現在では少子高齢化社会を支える大きな力として岩手県の医療に貢献しています。

初代神経内科教授である故東儀英夫教授主催の第30回日本脳卒中学会の実行委員長に始まり、第41回日本頭痛学会総会、第33回日本脳神経超音波学会総会、第9回日本ニューロリハビリテーション学会総会、第61回日本脳循環代謝学会総会（Brain Japan 2018）など多くの学会の学術大会長も経験させていただきました。

道半ばの就任8年目に発生した東日本大震災は教室運営にも大きな影響がありましたが、困難な状況にあっても常に私を助けてくれた神経内科・老年科の教室員と同門の先生方、大学および圭陵会関係者の方々に心から感謝いたします。

在任中に賜りましたご支援に深謝申し上げますとともに、圭陵会の益々のご発展と会員の皆様のご健勝をお祈り申し上げます。



定年退職のご挨拶

平成 31 年 3 月 31 日付

統合基礎講座

解剖学講座 機能形態学分野（歯学部）教授 藤 村 洋 朗

平成 31 年 3 月末日をもって岩手医科大学を定年退職することになりました。昭和 48 年に岩手医科大学歯学部への入学をご許可いただき、昭和 54 年卒業、それから 40 年間教員としてお世話になりました。学生時代を振り返りますと、今の学生さんたちがかわいそうでなりません。やりたいことができないからです。私は 1 年から 6 年までクラブに打ち込みました。3 年生以降は口腔解剖学の前任教授野坂先生に研究の楽しさを教えていただきました。昭和 50 年に当時の歯学部長富沢万之助先生から岩手歯学会という学内学会を立ち上げるから入らないかというお勧め、決して私だけに向けて言われたのではないのですが、学生として参加、一人で満足していました。5 年生では口腔衛生学の高江洲教授の授業の中で自由研究が夏休みの課題として提示されました。顕微鏡をのぞく楽しみを知ってしまった私は、学生としてはありえない走査型電子顕微鏡の使用を許可していただき毎晩寝ずに画像を覗き、元素分析をした結果を論文形式にまとめました。岩手医科大学歯学部では当時（今もですが）卒業論文なるものはありませんでしたが、この自由研究がそれにあたると思います。このような経験を今の学生さんたちはできないのです。夏休みを含めて約 6 か月間の空き時間をその自由研究に充てるなんてことはカリキュラム上、無理だからです。口腔衛生学講座の先生

方もかなりの時間を割いておられたと思います。当時は国家試験の成績もあまり気にする必要がなかったこともあり、ほとんどの歯学部教員が多くの時間を学生との対話に割いていました。その結果が、国家試験合格率にも反映されていたと思います。つまり、学生の教育を確保することで国家試験の結果が良くなる。＝成績の良い学生が受験してくる。結果として学生教育にかかる時間が減ってくる。＝研究時間が増える。私の在任期間はこの教育に時間をかける時期でした。もう少しです。現役教員の皆さんが教育に力を入れていただければ、次は研究時間の増加につながります。その結果が、大学の評価を上げることになり、活字に名前が出るようになると同窓会の皆様のお気持ちが活性化され、圭陵会の発展につながると思います。会員の皆様、もうしばらく、大学を暖かい目で見守ってください。必ず復活できます。

40 年間お世話になりました。本当にありがとうございました。圭陵会の益々のご発展をお祈り申し上げます。